日本医史学雑誌　第59巻第4号（2013）　533–546

明治初期日本における西洋解剖学的人体像の民衆への普及

――1875～7（明治8–10）年刊行「人体問答」書掲載の内臓図[1)]――

月澤美代子

順天堂大学医学部医史学研究室／順天堂大学大学院医学研究科

受付：平成25年6月19日／受理：平成25年10月11日

要旨：明治初期日本における西洋解剖学的人体像の民衆への普及に関して，学制期に小学校教科書として刊行された「人体問答」を表題に掲げた安価本の画像データを網羅的に収集して分析した．1875～7（明治8～10）年にかけて刊行された「人体問答」書46冊中，31冊には人体内臓に関する「問答」が掲載され，26冊には人体内臓図が掲載されていた．「人体問答」の執筆者が模倣の対象とした西洋解剖学書は極めて限定されていたが，上田文齋『校正小学人体問答』に掲載された「オリジナル」な「人体内臓図」は，「問答」の内容と無関係に最も多く採用されて日本各地に広がり，西洋解剖学的人体像の民衆への普及に一定の役割を果たした．

キーワード：「人体問答」書，解剖図，情報普及，民衆，明治時代

1. はじめに

明治初期，欧米から導入された医療情報は，さまざまな手段を介して日本全国へと広がっていった．西洋解剖学の教える人体に関する情報も同様である．既に江戸期において日本では『解体新書』（1774）のみならず『和蘭内景医範提鋼』（1805, 1808），『把爾翁澤（パルヘイン）解剖図譜』（1822）などの解剖図を併載した人体解剖学書が刊行されていたが，明治に入ってからは，さらに多数の解剖学書が刊行されていく．また，散発的とはいえ，人体解剖演習が各地の医学校に取り入れられていった．しかし，19世紀半ばの西欧において解剖学は既に高度な段階に達していた．ヴェサリウスの『ファブリカ』（1543）の刊行から300年の時を経て，1841年刊行のボックの『人体解剖図譜』（C.E. Bock, “Hand-Atlas der Anatomie des Menschen”）や，1870年刊行のハイツマンの『記述的人体局所解剖学』（C. Heitzmann, “Die descriptive und topographishes Anatomie des Menschen”）のような専門書の人体解剖図は精細を極めている．肉眼で観察されたマクロなアナトミーから，顕微鏡で観察された組織・細胞を中心とした解剖学，すなわち，ミクロなアナトミーへと時代は移行しつつあった．西洋医学を学ぼうとする明治初期の医師たちは，こうした解剖学書の図を木版，あるいは，銅版で職人たちに模刻させ，日本語での解剖学名を『重訂解体新書』，『医範提綱』等から採用し，あるいは自ら創作しながら，人体解剖学書を纂訳・刊行していった．

こうした時代において，西洋解剖学の教える人体の「内景」に関する情報は，解剖演習に参加することのできなかった一般民衆に，どのように伝達されていったのだろうか．医師たちによって翻訳刊行された欧米の人体解剖学書は一般民衆にも普及していたのだろうか．西洋解剖学の教える人体の「内景」は，何を媒介として，どのように民衆の間に広まっていったのだろうか．

本稿は，明治初期，公教育制度の導入とともに一般民衆の間に広がった一群の安価本を検討対象として，上記の問いに一つの側面から答えようとするものである．

2.「人体問答」という資料群

明治初期，「人体問答」を表題に掲げた一群の安価本[2]が日本各地で刊行された．いずれも和綴じ6～40丁程度の薄い小冊子である．以下，本稿では，この「人体問答」を表題に掲げた小冊子を「人体問答」書とよぶことにする．

「人体問答」書には詳細な人体内臓図が掲載されていることが多く，明治初期の『版権書目』において「医学書」として分類されていたこともある[3]．しかし，ほとんどの「人体問答」書の「問答」の医学的内容のレベルは極めて低く，医師たちが参照したものとは思えない．

「人体問答」書は初等教育の学校現場で使用された教科書であった．明治5年5月，文部省の布達によって，文部省直轄の師範学校が東京に設置され，当時，開成学校で教鞭をとっていたアメリカ人，M.M.スコットが招聘され，9月からは授業が開始された．既に文部省から「学制」が公布され文部省教則が示されていたが，師範学校には新しい教則の立案・制定が課せられていた．1873（明治6）年2月，師範学校の「下等小学教則」が定められた．これは5月には改訂され，さらに，1874（明治7）年1月には再改訂されたが，この師範学校制定「下等小学教則」の中に「問答」という科目がある．「問答」科の目的は，スコットによって日本に導入されたオブジェクト・レッスン（庶物示教・実物教育）の理念を取り入れ，「小児の感覚を挑発し」，「考究を究め」，「智力を培養」することにあった[4]が，実際に行われたのは，教師の発する「問」に対し，あらかじめ暗記した「答」を正しく答えさせる注入式一斉教育に他ならなかった[5]．「問答」の中で下等小学第7級という低学年向けに編纂・刊行されたのが「人体問答」書であった[6]．

教科書に関する先行研究は極めて多い．特に，明治期における小学校の教科書に関しては充実した研究が多数蓄積されている．また，ペスタロッチ方式に淵源をもつオブジェクト・レッスンの形成過程，さらには，日本への導入過程，あるいは，教育理論の面からの「問答」教育の検討に関する先行研究も多い[7]．「人体問答」に関しても保健教育史関連，あるいは，歯科医学史関係の学会において，何冊かの「人体問答」書を対象に内容を紹介する発表が，これまで行われてきた[8]．しかし，下記に示すような「人体問答」書の特色に焦点をあてて西洋医学の一般民衆への普及過程と関連付けて分析した研究は，これまで行われていない．

明治前期は翻訳教科書時代とされている[9]．しかし，「人体問答」書のほとんどは欧米の教科書の翻訳ないしは纂訳書としてではなく，日本人によって書きおろされ，容易に模倣され改変されながら出版されていった．

「人体問答」書が日本人たちにより書き下ろされ自由に模倣改変された歴史的背景として次の2点を押さえておきたい．当時，教科書の中央統制は行われておらず，「土地の状況に応じて」教科書を出版することが可能だった．文部省は1873（明治6）年5月，文部省蔵版教科書について部数を限って印刷を許可する通達を出し，翌年東京師範学校・開成学校蔵版教科書についても印刷を許可した．そのため，地方においては原本教科書にならった地方翻刻（複製）教科書が多数発行された[10]．しかし，「人体問答」の東京師範学校版教科書の刊行は遅れ，「人体問答」に特化した教授書の刊行は1876（明治9）年末から開始された[11]．1875（明治8）年から1876（明治9）年においては，いわば，「教科あって教科書なし[12]」という空白状況が生まれていたのである．さらに，次の点も重要である．「人体問答」という教科は，第7級，すなわち，6歳から7歳という幼童を対象に設定されていた[13]．しかも，「人体」に関する知識の獲得は主要な目的とされていなかった．「人体問答」書の執筆者の多くは，多種多様な社会的・文化的・教養的背景をもつ，いわゆる地域の民衆たちであり，必ずしも「教育」の専門家でも「人体」に関する学の専門家でもなかった．

本稿では，まず，明治期に刊行された「人体問

答」書の網羅的な収集・整理の結果を紹介する．この上で，特徴的な2グループを選び，特色となる要素を抽出し，掲載された「人体内臓図」を中心に，その模倣と普及の状況を分析していきたい．

3. 研究対象と方法：明治期刊行「人体問答」書の収集と分析

1）書誌情報の収集

下記の情報源から，タイトル中に「人体」（「人身」），および，「問答」が含まれている書をリストアップした．

①海後宗臣編『日本教科書大系　近代篇　第21–24巻　理科（一）～（四）』東京：講談社；1965. 第24巻．p.9–41．理科教科書総目録[14]

②鳥居美和子著『明治以降教科書総合目録　1 小学校編（国立教育研究所編．教育文化総合目録；第3集[15]）』東京：小宮山書店；1967

③順天堂大学図書館編『山崎文庫目録』1969

④国立国会図書館HP．近代デジタルライブラリー．http://kindai.ndl.go.jp/index.html（最終検索：2011/8/17）

⑤国立教育政策研究所　教育図書館．戦前教科書データベース（最終検索：2011/9/8）

⑥東京書籍株式会社設　教科書図書館．東書文庫蔵書検索．http://www.tosho-bunko.jp/search/（最終検索：2011/8/18）

⑦国内大学図書館資料検索nacsis-webcat（最終検索：2011/8/11）

⑧筑波大学付属図書館所蔵本　筑波大学附属図書館O-Pacで検索（最終検索：2011/8/18）

⑨東京学芸大学図書館所蔵本　学芸大学附属図書館O-Pacで検索（最終検索：2011/8/18）

・この他，大阪教育大学附属図書館，京都大学附属図書館，東京大学附属図書館，広島大学附属図書館等の蔵書目録での検索を行った．

2）書誌情報の整理

エクセル表に登録．以下の方針に添って整理し，研究の基本となる資料として56冊の書誌データと画像データを採録した[16]．

①外題と内題で異なったタイトルで登録されていた同一本を整理．

②同一著者であっても，出版年，版の異なるもので問答，掲載図など内容に違いがある場合は，それぞれ1件として登録．また，同一著者，同一年刊行のものであっても，内容に違いがある場合は，それぞれ1件として登録した．

③同一著者，同一内容，同一版で，出版地のみ異なるものは，1件として登録．

④「人体問答」を含んでいるが，表題にはなく，「いろは図」「単語図」「府県名」などと一緒に合本されているものは除外した．

⑤江馬元齢『人身問答』の前篇，後篇，上田文齋『校正小学人体問答』と，その二篇，真山元『小学人体問答』上，下は，それぞれ，内容的に異なるため，別々に2冊としてカウントした．

3）グループ化

本稿における分析の対象として，次の2つのグループを抽出した．

グループ1）

1875～6（明治8～9）年刊行　東京師範学校卒業生の「人体問答」書

1873（明治6）年から1875（明治8）年にかけて東京の師範学校を卒業した教員たちの刊行した「人体問答」書であり，以下のものが含まれる．

・林多一郎（明治6年7月卒業，栃木県師範学校教員）口述．坂部教宜編輯『小学問答』栃木県；明治8年11月

・林多一郎口述『改正小学人体問答』栃木県；明治10年8月

・岡村　邁（明治8年10月卒業　兵庫県訓導）『下等小学人体問答法』大阪府；明治9年5月

・神矢肅一（明治8年6月卒業　飾磨県[17]訓導）『小学人体窮理問答』飾磨県；明治9年6月

・小倉庫二（明治8年6月卒業　兵庫県訓導）『小学人体問答』兵庫県；明治9年9月

・小林義則（明治7年6月卒業　神奈川県師範学校教員）『小学部分問答』東京府；明治9年9月

・真山　元（明治8年1月卒業）『小学人体問答上，下』石川県；明治9年12月

グループ2）

大阪・堺で出版された「人体問答」書

「人体問答」書が最も多く刊行されたのは，堺県[18]と大阪府であった．特に上田鹿太郎，上田文齋，松川半山のものは大阪・堺で出版された18冊中10冊を占め，相互に融合しあいながら改版されていっている．堺県在住の文筆家であった上田鹿太郎の詳細な経歴は不明だが，上田文齋は大阪府西区長堀で開業する医師，松川半山は大阪府道修町在住の画工であり，いずれも，師範学校を卒業していない．師範学校卒業生たちの「人体問答」書との比較の観点から，このグループを抽出してみた．

4. 師範学校コードと鹿太郎・文齋パターンの分析

4.1. 東京師範学校卒業生の『人体問答』書

1）林多一郎（口述）『小学問答』の分析

マリオン・スコットの直接の指導を受けた東京師範学校第一回卒業生，林多一郎口述の『小学問答　人体ノ区分，通常物，色ノ図ノ部』（栃木県；明治8年11月）には，人体・通常物・色の「問答」パターンが例示されており，授業を実際に進めていく教師向けの手引き書となっている．図としては，色刷りの「色」図が2枚綴じ込まれており，最初は，こうした図を幼童に見せながら授業を進めていくように指示されているが，人体に関する図は掲載されていない．第1ページ目に載せられた「小学問答例言」には，「人体問答」は「単語問答」の次の段階であり，「実地ニ就キ之ヲ擴張スルモノナリ」とした上で，指導の際のポイントが，次のように具体的に3点示されている．すなわち，①人体内部は「中学以上」で扱うものであり，小学では扱わない．②「体外各部ノ名目トソノ功用ノ大略」だけを扱う．③頸顔，五官に関しては詳しく扱う．文頭，「人体問答」は「人身窮理ノ階梯」であると規定されている．すなわち，「人身窮理」と別個独立なものとしては考えられていない．しかし，人体の部分分けは，実地の授業の展開のやりやすさに従うとしており，人身窮理とは異なるゆえ，人身窮理の観点からの批判はしないようにと釘が打たれている．問答パターンは，漢字カタカナ混交文で示されている．

2）「人体問答」書のデュアル・ニーズ

1876（明治9）年には，東京の師範学校関係者の8冊の「人体問答」書が刊行されている．この8冊の分析から次の点が明らかになった．すなわち，「人体問答」書の刊行にはデュアル・ニーズがあった．「人体問答」という教科の指導対象である6歳から7歳の幼童が手元に置いて見るための「教科書」としての用途と，指導者としての教員が指導の参考にする「参考書」，あるいは，「教授書」としての用途である．1875～76（明治8～9）年に刊行されたほとんどの「人体問答」書において，この2つの用途は混在しており，自覚的に区別して書かれていることは少ない．例外として，1876（明治9）年6月刊行の神矢肅一の『小学人体窮理問答』がある．ここでは「凡例」において，「教師ノ心得」として無機物有機物に関して説明する第一章，さらに第六章には「山避ニテ佳書ニ乏キ教師ノ一助」として「内部ノ概略」を説明する附録を付け，「幼童」に教えるべきことは第2～5章であると明確に示されている．

3）師範学校コード

東京師範学校卒業生たちの「人体問答」書の「問答」の内容の標準化はきわめて「ゆるい」ものであった．たとえば，「問　身体は何部に区分されるか」という「問」そのものは，いずれにも登場するが，答は，それぞれの著者によって異なっている．しかし，幼童に何を教えるべきという点に関しては，一定の共通コードを抽出することができる．幼童向けと明確に規定されている神矢肅一の『小学人体窮理問答』第2～5章，さらに，小林義則『小学部分問答』，小倉庫二『小学人体問答』，岡村邁『下等小学人体問答法』から共通コードを抽出してみよう．小林は1875（明治7）年，小倉，岡村はそれぞれ，1876（明治8）年の東京師範学校卒業生であった．「人体問答」書刊行当時，兵庫県訓導であった岡村邁は，冒頭の「凡例」において，「余東京師範学校ニ於テ実地

ニ施行セシ所ヲ」記すと明言している．こうした「人体問答」書においては，林多一郎が「例言」で述べていた①～③の基本原則が忠実に踏襲されており，いずれも，「緒言」「例言」において，下等小学第七学年生を対象にするため，内臓に関しては詳細を扱わないことが明言されている．具体的な問・答パターンが漢字カタカナ混交文で記されており，「問」は林多一郎のものと同様，体外各部の「名目」と「功用」の大略に関するものである．しかし，頸顔・五官に関しては，かなり詳しく扱われている．図は，小倉庫二『小学人体問答』に簡略なものが載せられている他は掲載されていない．

4.2. 堺・大阪で出版された「人体問答」書 ――鹿太郎・文齋パターン――

「人体問答」書の中で最も目をひく一群を成しているのが，堺県と大阪府で出版されたものである．56冊中18冊を占め，このうち10冊が上田鹿太郎，上田文齋，松川半山の一連の影響関係の中で生み出されている．ここでは，まず，1875（明治8）年という最も早い時期に出版された上田鹿太郎『小学必用人体問答』（明治8年5月）と上田文齋『校正小学人体問答』（明治8年12月）を内容に注目しながら比較検討[19]してみよう．

両書の全体の構成は基本的に同一である．全体を5章に分けて，第1章：全体（身体の部分分け），第2章：上部（頭部・顔面の5官），第3章：中部（胴，躯体），第4章：四肢，第5章：「急所」から「動脈」へと「問答」を進めていく．「問答」の内容には鹿太郎本と文齋本で質的に大きな違いがあるが，この詳細な検討は別稿に譲りたい．文齋本は，鹿太郎本の第二章（顔面部分）の「問答」を大幅にカットしており，第三章（胴・躯体部分，人体内臓部分）の「問答」を増加させている．ここには，人体内臓に関する「問答」が含まれる．一方，鹿太郎本には，人体内臓に関する「問答」は全く無い．

次に掲載図について検討してみよう．鹿太郎本の図は人体外表面の図1枚のみであり，人体内臓の解剖学的な図は無い．一方，文齋本には4枚の図，すなわち，「全体骨格之図」，「全体面背之図」，「動脈循環之図」，「全体之中部内臓位置之図」を巻頭に掲載している．図と本文の「問答」は対応しており，「問答」は図を観察し対応する用語を見ながら展開されていくように構成されている．

5. 1875～1877（明治8～10）年刊行「人体問答」書の分析

1878（明治11）年刊行の3冊と1889（明治22）年刊行の1冊は，ほとんどが再版本であるため，以下の分析は，1875～7（明治8～10）年刊行「人体問答」書に関して行った．なお，教授書，纂訳書，教師用指導書，問答の「答」のみの小冊子は直接の分析対象から外した．この結果，以下の分析の対象とするのは46冊である．

5.1. 内容の分析：師範学校コードと文齋パターンとの関係

師範学校コードでは，「問答」の内容は人体外部にとどめ，内臓にはふれないとなっていた．しかし，46冊中31冊に内臓器官に関する「問答」が掲載されており[20]，このうち11冊では詳細な説明を加えていた．しかも，人体の胸腹部内臓の図を掲載しているものが26冊と半数以上にのぼった．これと関連するのが，「人体の急所」と「動脈」の分布の説明を「問答」の最後にもってくる鹿太郎・文齋パターンである．17冊で「人体の急所」をあげ，11冊でこれに続いて「動脈」の「問答」をあげている．

表1　1875～1877（明治8～10）年刊行「人体問答」書における内臓器官に関する言及

年度別分析対象冊数					内臓に関する「問答」		急所	動脈	内臓図
明治（年）	8	9	10	計	有り（詳細）	無し	有り	有り	有り
冊数	7	24	15	46	31（11）	15	17	11	26

表2　「人体問答」書に掲載された人体内臓図の元図と年度別刊行数[21)]

明治（年）	西暦（年）	A	B	C	D	E	F	G	H
		合信『全体新論』	ウィルソン・リーダー	キュンストレーキ型	文齋：全体之中部内臓位置之図	文齋：網膜なし	文齋：第二編	浦谷義春『解剖新図』	その他・不明
8	1875	1			1				
9	1876	3	1	1	7	1	1		2
10	1877	2	1	2	4	1		2	2
計（冊数）		6	2	3	12	2	1	2	4

5.2. 人体内臓図の分析

1875（明治8）年に刊行された「人体問答」書のうち巻頭に人体内臓図を掲載したものは，上田文齋『校正小学人体問答』（明治8年12月）のみである．一方，1875（明治8）年7月に刊行された生駒東太『人体問答図解』には文中に「問答」に対応した挿絵が描かれている．この図の中に人体内臓の部分図があるが，いずれも，合信『全体新論』から模刻したと思われる図である．以下，「模倣・普及」をキーワードとして「人体問答」書に掲載された人体内臓図の分析を行っていきたい．

1)「人体問答」書中の人体内臓図

巻頭図として，あるいは，文中挿絵として掲載されている「人体内臓図」は次の7パターンに分けることができる．表2には「人体問答」書に掲載された人体内臓図の元図と年度別刊行数を示した．なお，分類不可能なものは，「その他，不明」としてある．

（A）合信『全体新論』掲載の人体内臓図
（B）ウィルソン・リーダー第四巻掲載の人体内臓図
（C）キュンストレーキ型人体内臓図
（D）上田文齋『校正小学人体問答』（明治8年12月）「全体之中部内臓位置之図」
（E）文齋（D）と似ているが，「網膜」が記載されていないもの．
（F）上田文齋『校正小学人体問答　第二編』（明治9年3月）掲載の人体内臓図
（G）浦谷義春『解剖新図』掲載の人体内臓図

7つの図は大きく2つのパターンに分かれる．元図をそのまま模倣したものと，「オリジナルな図」である．この場合の「オリジナル」は，あくまでも「 」付きの「オリジナル」だが，その説明は後に回し，まず（A）～（C）の「内臓図」を説明していきたい．

（A）合信『全体新論』掲載の人体内臓図

小野田虎太『小学人体部分問答』（大阪府；明治9年5月），神矢粛一『小学人体窮理問答』（飾磨県；明治9年6月），千賀性海『初学人体問答』（三重県；明治10年3月）の巻頭に掲げられた「人体内臓図」は，合信『全体新論』から採られたと思われる．この他，生駒東太『人体問答図解』（堺県；明治8年7月），馬場吉人『人体問答』（東京府；明治9年11月）など，文中挿絵として合信『全体新論』の図を模刻転載した「人体問答」書が6冊ある．『全体新論』は，清朝期の中国で活動した英国人宣教師ベンジャミン・ホブソン（Benjamin Hobson, 1816–1873）が1851（咸豊元）年に初版本を刊行したとされる解剖生理学書である．キリスト教布教のための啓蒙的要素が強く，1853（咸豊三）年に刊行された再版本の現存が確認されている．日本においては，1857（安政4）年に清本が翻刻され，さらに，1873（明治7）年には，3種類の和訳本が東京，大阪の書肆から刊行されていた．いずれも清版からの重訳本である．『全体新論』には，西洋解剖学書から転載，模刻された人体内臓図が多数，掲載されている．日本で刊行された和訳本のいずれの版も画像を転載しているが，極めて稚拙な模刻が行われてお

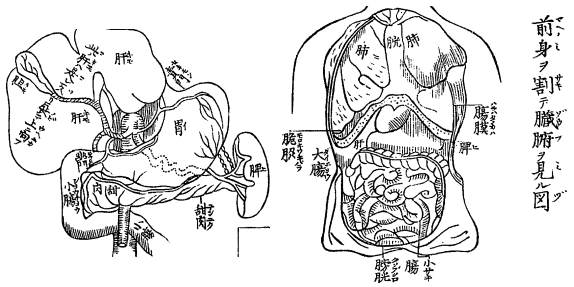


図1　合信著，高木熊三郎訳，『全体新論訳解』（大阪：文栄堂，明治7年4月刊行）掲載の内臓図

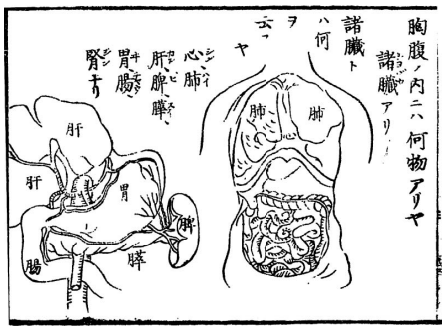


図2　生駒東太『人体問答図解』（大阪：鹿田静七，明治8年7月刊行）掲載の内臓図

り，人体内臓について何かしらの基礎知識をもった者が下絵を描いているとは思えない．具体例として合信著，高木熊三郎訳，『全体新論訳解』（大阪：文栄堂，明治7年5月）に掲載された図と生駒東太『人体問答図解』の掲載図を，それぞれ，図1，図2に示した．

（B）ウィルソン・リーダー第四巻掲載の「人体内臓図」

1876（明治9）年12月に大阪で刊行された永田方正訳『小学人体窮理問答』は，ウィルソン・リーダー第四巻（Marcius Willson “The Fourth Reader of the School and Family Series”, Harper and Brothers; New York, 1860）の‘Part One’のうちの‘Human Physiology and Health’部分を摘訳したものだが，ここには，人体内臓図と消化器図が掲載されている[22]．この図は，千賀性海『初学人体問答』（伊勢山田；明治10年3月）に「全体之中部内臓位置之図」，「胃腸図」として模倣・刊行された．しかし，元本にあった解剖学部位名は記載されておらず，極めて稚拙な模倣であると云わざるを得ない．

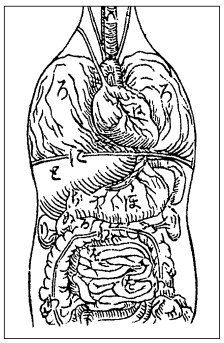


図3　永田方正訳『小学人体窮理問答』（大阪：岡田茂兵衛，明治9年12月刊行）掲載の人体内臓図（国立国会図書館蔵）

（C）キュンストレーキ型人体内臓図

東京府師範学校教員であった中里亮の『小学人体問答』（東京府；明治9年6月）には，巻頭に図が5枚付けられている．そのうちの1枚が「キュンストレーキ型人体内臓図」である．キュンストレーキとは，幕末から明治初期にかけて医学専門教育の教材としてフランスから舶載された等身大の人体解剖模型[23]であり，江戸の医学所から東京医学校に引き継がれたキュンストレーキは，1871（明治4）年，湯島の聖堂で開催された教育博覧会で公衆の前に展示された．この時スケッチされたのか，あるいは，東京府師範学校教員である中里は東京医学校所蔵の「キュンストレーキ」を親しく視察する機会を得たのか解らない．また，誰によって描かれた図なのかも解らない．この図は，教師用指導書として刊行された金子尚政の『小学人体問答』（山梨県；明治10年7月，12月）にも掲載されたが，これ以外には，この図を模倣・掲載した「人体問答」書は無い．

2）上田文齋「全体之中部内臓位置之図」の元図の検討

上田文齋『校正小学人体問答』に掲載された「全体之中部内臓位置之図」（D）は，（A）～（C）の「人体内臓図」に較べて非常に鮮明，かつ，印象的な図である．この「全体之中部内臓位置之図」を検討してみよう．この図には，人体内臓図として，他の解剖図には見られないいくつかの特徴がある．まず，①胆嚢が肝臓の前面に描かれている．②心臓，肺臓，胃等の主要臓器に混じって，網膜が記載されている．③横行結腸が途中で断ち切られ断面が一部見えている．④消化器を中心に描かれているにもかかわらず，食道ではなく，気管が明瞭に描かれている．

元図を検討してみよう．上田文齋『校正小学人体問答』の「奥付」には明治8年11月御届，同12月出版と記されている．1875（明治8）年11月までに日本で刊行された人体解剖学書には，この文齋図と同様な特徴を有する解剖図を論者は発見することができなかった．元図の手掛かりとして唯一の情報は，文齋パターンの図を掲載した高坂柳軒『下等小学人体問答』（愛媛県；明治10年6月刊行）の「凡例」にある「図式ハ英版ヂョンストン氏ノ解剖生理ノ図ヲ以テ抜粋シ[24]」という文言である．これを元に文齋図の制作過程を追跡してみよう．

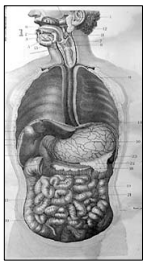
上田文齋が『校正小学人体問答』に掲載した「全体之中部内臓位置之図」の元図は，エジンバラで刊行された人体掛図“W. & A.K. Johnston’s charts of anatomy and physiology”であったと思われる．これは，エジンバラ大学解剖学教授のウイリアム・ターナー（William Turner）の指導のもと，8枚組の掛図としてエジンバラの著名な印刷業者W. & A.K. Johnston社から出版されたものであった．この掛図には，銅版リトグラフで摺られた精緻な人体解剖図が掲載されている．上田文齋『校正小学人体問答　二篇』（明治9年3月）掲載の図3枚，すなわち，「動静血脈循環」，「全体筋肉之図」，「交感神経之図」は，それぞれ，このJohnstonの掛図の‘Veins & Lungs’，‘Muscles’，‘Nervous System’の図とほとんど一致しており，そのまま模倣・作図したものと思われる．

次に文齋の「全体之中部内臓位置之図」の画像の作成過程について考えてみよう．8枚の掛図のうちには，この画像と一致するものは無い．しかし，図4のように，‘Organs and Digestion’の「人体内臓図」と‘Veins and Lungs’の「胸部内臓図」を合成すると文齋の「全体之中部内臓位置之図」が浮き上がってくる．

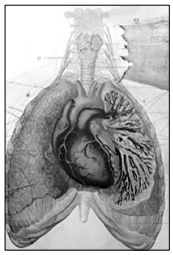
まず，‘Organs and Digestion’図（元図A）と文齋図を比較検討してみよう．①元図Aでは，肝臓が持ち上げられ，内側にある胆嚢が明示されているが，文齋図では肝臓の前面に胆嚢があるよう表現されている．②網膜が同一の形で表現されている．③大腸が横行結腸の部分で切断されており，断面が一部見えるようになっている．この他，小腸の表現など両図の類似点は多い．さらに，‘Veins and Lungs’図（元図B）と文齋図は次の点で共通している．④気管が明瞭に描かれている．⑤右肺は肺表面の表現，左肺は肺の断面を示している．⑥心臓の表現が極めて類似している．

文齋は，おそらく，“W. & A. K. Johnston’s charts of anatomy and physiology”の図を画工に見せて下図を描かせたと思われる．この時，画工は‘Organs and Digestion’図の顔面頭部を省略し，代わりに日本人の正面向き顔面の下半分を付けて「オリジナルな」図を作成した．

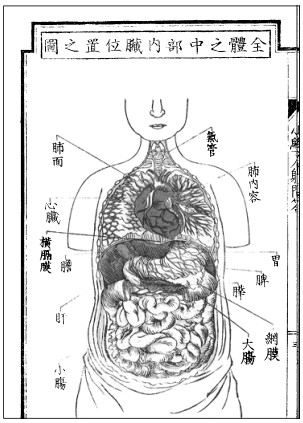
次に内臓部位名について考察してみよう．“W. & A.K. Johnston’s charts of anatomy and physiology”の各画像には，通例の解剖図のように，図中に矢印が付けられ符号が記されている．符号に応じた解剖部位名は掛図の中には書かれていない．この“W. & A.K. Johnston’s charts”には説明書である“Manual to accompany W. & A.K. Johnston’s Charts of anatomy and physiology”が付けられており，論者は，この“Manual”をまだ未見だが，おそらく解剖部位名はそちらに記載されているものと思われる．掛図の‘Organs and Digestion’に付けられた符号の数は24だが，文齋が「全体之中部内臓之図」に付した解剖部位名は13である．ここから考えると，内臓部位名もコピーとしてではなく，文齋が選択しつつ付けたということができよう．



Organs and Digestion（元図A）



Veins and Lungs（元図B）



上田文齋「全体之中部内臓位置之図」

図4　“W. & A. K. Johnston’s charts of anatomy and physiology” 掲載の図と上田文齋『校正小学人体問答』掲載の「全体之中部内臓位置之図」の関係（“W. & A. K. Johnston’s charts of anatomy and physiology”：月澤蔵書，上田文齋『校正小学人体問答』：月澤蔵書）

文齋は，ただ元図をコピーするのではなく日本の幼童向け教科書用に「オリジナルな」図に仕上げている．

3）上田文齋「全体之中部内臓位置之図」の普及

538ページに掲げた表2に見るように，この上田文齋「全体之中部内臓位置之図」は「人体問答」書において最も多く模倣転載されている．表3は，上田文齋「全体之中部内臓位置之図」の特徴を共有する内臓図を掲載した「人体問答」書の分布を示している．

表3が示すように上田文齋「全体之中部内臓位置之図」類似の「人体内臓図」は，大阪，堺ばかりでなく，滋賀，愛知，石川，京都，愛媛と広い地域の「人体問答」書に取り入れられていった．人体内臓図掲載の「人体問答」書，26冊中の12冊までが，この上田文齋「全体之中部内臓位置之図」類似の「人体内臓図」であった．この中には増山守正『人体問答纂要備考』（京都；明治10年5月）巻頭図のように，一見，文齋と異なる図のように見えるものもある．しかし，ここには「網膜」が記載されており，顔を描き直しているだけで内臓図としては文齋の図と同一である．

一方，文齋の図とほぼ同一と思われるにもかかわらず，「網膜」の記載の無いもの（すなわち表2の（E））が，この12冊以外に2冊あった．神矢粛一『小学人体窮理問答』（明治9年6月）と西坂成一『初学須知人体問答』（明治10年3月）で

表3　上田文齋「全体之中部内臓位置之図」類似の内臓図を掲載した「人体問答」書の年度別・地域（府県）別分布

西暦（年）	明治（年）	大阪	堺	滋賀	愛知	石川	京都	愛媛	計（冊数）
1875	8	1							1
1876	9	3	1	1	1	1			7
1877	10	1					2	1	4
計（冊数）		5	1	1	1	1	2	1	12

ある．神矢本は，文齋本の「急所」・「動脈」パターンの「問答」を採り入れており，文齋本を参考にして一部改変した可能性が高い．一方，西坂本の「人体内臓図」は極めて稚拙な図であり，文齋本を参考にしたと断定することができない．

大阪・堺で出版された5冊のうち，小野田虎太のもの以外の4冊は，いずれも上田文齋，上田鹿太郎，松川半山のものであり，一連の相互関係の中で生み出されている．

上田文齋の『校正増補小学人体問答』（大阪：前川善兵衛；明治9年10月）では，『校正小学人体問答』（大阪：前川善兵衛；明治8年11月）と同一の版が使用されている．また，松川半山『小学教授　人体問答』（大阪：三木佐助；明治9年8月）と松川半山編輯・上田文齋訂正『訂正小学人体問答』（大阪：前川善兵衛；明治10年3月）では同一の図版が使用されている．「問答」パターンは，『校正増補小学人体問答』では『校正小学人体問答』と別パターンになっているが，「問答」と「図像」は，それぞれ対応している．

一方，上田鹿太郎版の図版は，出版の度に大きく変化している．まず，『改正図解小学人体問答』（堺：鈴木久三郎；明治9年11月）では，新たな版として描き直された上田文齋「全体之中部内臓位置之図」が，そして，上田鹿太郎編輯，松川半山校正『小学人体問答』（大阪：三木美紀；明治10年2月）では，これとは異なる図，すなわち，浦谷義春『解剖新図』（大阪；明治8年10月）を模倣した銅版で彫られた内臓図が掲載されている．しかし，ここで注目すべきは，全ての鹿太郎版で「問答」は同一ということである．すなわち，精密な人体内臓図を掲載しつつ，鹿太郎本には，どの一冊にも人体内臓に関する「問答」は登場していない．

4）上田文齋「全体之中部内臓位置之図」類似の「人体内臓図」掲載書の「問答」と「図」の内容の比較検討

1878（明治11）年刊行の平田完治のものを加え，上田文齋「全体之中部内臓位置之図」類似の「人体内臓図」を掲載している8冊の「人体問答」書の「問答」の内容を比較検討した．模倣のパターンは必ずしも同一ではない．上田文齋『校正小学人体問答』の「問答」，「図」を完全に模倣し，自分の名を付けて刊行した剽窃本は1878（明治11）年3月の平田完治『小学必読人体問答』のみであった．1876～7（明治9～10）年に刊行された他の7冊はいずれも，文齋図を模倣した図を掲載しているが，「問答」内容等に何かしら改変・追加・省略を加え「オリジナル」なものを作成している．以下，検討の結果を紹介していきたい．

「問答」パターンを，基本的に文齋本に沿って構成しているのは，堀野良平，足立竹亭，高坂柳軒の3冊である．いずれも「万物の霊としての人間」から最初の「問い」を始め，末尾近くに「人体ノ中最要ニ扱フ可キ部分ハ何カ」という問に対して，「両眼，鼻下，結喉，胸部，両脇，睾丸，動脈」，すなわち，九竅をあげ，さらに，動脈として「顳顬，両頸，腋窩，腕前，両股，跗前」と答えている．内臓に関する「問答」も，ほぼ文齋のものと等しい．

これに対して，1876（明治9）年2月版権免許の庄野欽平『小学人体問答』は独特の位置を占めている．巻頭には文齋の内臓図を掲載しているが，内臓観は五臓六腑に留まっており，次のような「問答」が登場している．「〇腹内ニハ如何ナルモノヲ蔵セルヤ　△腑腸　〇五臓トハ何々ヲ云フヤ　△心臓，肺臓，脾臓，肝臓，腎臓ヲ云」．

小野田虎太，真山元，増山守正のスタンスは，

これとは別のものである．小野田虎太は「凡例」において，本書の位置づけを「人身窮理ノ一助」としている．「巻首ニ精密ナル図ヲ附シテ小学生徒ニ記憶シヤスカラム」としているが，文齋の内臓図の他に掲載しているのは合信『全体新論』の図であり，およそ「精密なる図」とは言えない．しかし，人体内臓に関する「問答」は文齋『校正小学問答』に比べて一層詳細であり，消化器，循環器，呼吸器，泌尿器，神経系等について，臓器名とその作用について詳説している[25]．一例をあげよう．「膵ハ何ノ功用ヲ主ドルヤ．膵液ヲ分泌シテ食物ノ消化ヲ助クルコトヲ主ドル」．膵臓は，中国伝統医学における人体像では臓腑として登場しておらず，西洋解剖学の導入によって，日本人が知ることになった臓器である．

真山元『小学人体問答』は，上・下二巻の構成となっている．人体内部を扱う下巻，第三章「内部ノ道具」において内臓器官の作用が扱われているが，文齋の図に必ずしも対応したものとは言えない．例えば，次の「問答」がある．「問：内臓ノ最モ肝要ニシテ心得ヘキ道具ハ凡幾何アルヤ．答：肺，心，脳，胃，肝，膽，脾，大小腸，神経，血脈等ナリ」文齋の図を観察しても，この順番で答えることはできない．また，ここでは膵臓が省略されている．

増山守正纂述『小学生徒人体問答纂要備考』では，凡例において「幼童人体問答ノ一助トス」と称しつつ，次のように本音を喝破している．「皮相ノ位置五官ノ作用ノ如キニ至テハ乳児平生該母ノ教訓ヲ受ケ（略）能ク之ヲ知リ得テ堂々タル教師ノ教訓ヲ仰ガザル者無キニ非ス是ヲ以テ僕更ニ一歩ヲ進メ聊カ内景ノ端倪ヲ顕スノ学有ル由縁ニシテ衆書ト合セテ以テ其壁ヲ全フト云ヘキ」．すなわち，教師の威厳を表すには母親の教えることのできない知識を教えるべきというのである．かくして増山守正の生み出した「問答」は，ただただ暗記を生徒に強要する分解発問式問答の最悪の見本となっている．「問：皮膚汗孔ノ大数ハ如何．答：大約二十三億八萬一千二百有余ナリ」．「問：下部ノ腹腰以下ノ称ニシテ又更ニ其委細ヲ聞シ．答：胃脾肝膽腎膵膀胱小腸大腸男子陰茎睾丸精嚢女子子宮陰具諸骨並ニ下肢ノ股脚膝腸脛内踝外踝跗趾踵蹠等ナリ」．これでは，図を注意深く観察したとしても，到底，答えることはできない．ひたすら教師の権威に服しつつ，丸暗記・暗誦するのみである．

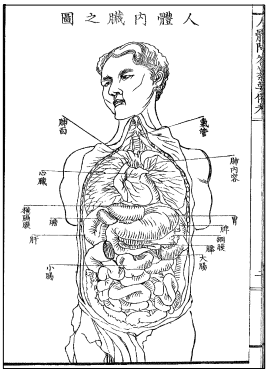


図5　増山守正纂述『小学生徒人体問答纂要備考』掲載の内臓図（順天堂大学蔵）

以上，検討してきたことを纏めてみよう．上田文齋「全体之中部内臓位置之図」は，必ずしも文齋の「問答」内容と一体化して採用されたわけではない．人体内臓に関する「問答」を作成する者が，とりあえず利用可能な「精密」な図として巻頭に掲げたということができるだろう．

6. おわりに
――民衆の選択した「人体内臓図」――

書誌情報を元に「人体問答」書を収集し，1875～7（明治8～10）年という短い間に日本各地で刊行された「人体問答」を書名につけた安価本を検討した．この分析の結果，以下の点を明らかにすることができた．

東京の師範学校卒業生が編纂・刊行した「人体問答」書のうち1875（明治8）年に刊行されたのは林多一郎『小学問答』だけだが，1876（明治9）年に入ってから急増した．林多一郎本を中心に師範学校卒業生の「人体問答」書に共通に見られる特徴から師範学校コードを抽出した．師範学校コードとしては，「問答」で扱う内容は人体外部に留め，人体内部は小学校では扱わないとしていた．しかし，1875～7（明治8～10）年にかけて

日本全国で刊行された「人体問答」書中のおよそ70%には人体内臓に関する「問答」が掲載され，半数以上には人体内臓図が掲載されていた．これは，安価本の購買層としての明治初期日本の民衆のニーズ，すなわち，西洋解剖学的人体の「内景」に対する関心の高さを反映していると受け止めることができるだろう．

既に書いたように，江戸期において日本では，精緻な解剖図を併載した西洋人体解剖学書が翻訳・刊行されていた．また，1872～74（明治5～7）年にかけて，人体解剖学書が東京・大阪・京都の三府を中心に複数出版されていた．しかし，1875～7（明治8～10）年刊行の「人体問答」書の執筆者たちが参考にしている人体内臓図は極めて限定されていた．

1874（明治7）年に3種類の和訳本の刊行された合信の『全体新論』には，人体内臓図が多数掲載されており，民衆への西洋解剖学的情報の普及に大きな役割を果たしたとされてきた．この内臓図を模倣・翻刻した図を掲載した「人体問答」書が6冊，存在する．しかし，『全体新論』掲載の人体内臓図は，1874（明治7）年刊行の和訳本においては，内臓に関する知識をもたない彫工による模刻を重ねており，ほとんど何か判別できないほどに良い加減なものとなっており，これをさらに模刻した「人体問答」書掲載の内臓図も，個々の内臓はほとんど判別困難である．また，東京府師範学校教員であった中里亮の著した『小学人体問答』には，「オリジナルの」キュンストレーキ型人体図が掲載された．しかし，中里亮が教員たちの「参考」にするために出版した「人体問答」書に掲載したキュンストレーキ図を模倣する者は，師範学校卒業生の金子尚政以外，誰もいなかった．さらに，東京の師範学校が模範本として採用していた『小学読本』の原著であるMarcius Willsonのウィルソン・リーダーのうち，人体内臓を扱っている第四巻が1876（明治9）年に永田方正によって摘訳され，内臓図も模倣翻刻されていたが，この図を掲載する者も極めて限られていた．

日本各地の「人体問答」書の刊行者が選択したのは，大阪の開業医である上田文齋の『校正小学人体問答』に掲載された「全体之中部内臓位置之図」であった．この図は，エジンバラの印刷業社W.& A.K. Johnston社から出版された8枚組の掛図を元に作成されている．しかし，そのまま模倣したものではなく，2枚の図を組み合わせて1枚の図を作成し直し，基本的なもののみを選択して，日本語で解剖部位名を付け直し，幼童にも馴染みやすいように美しく彩色された「オリジナルの」解剖図であった．当時，日本に出回っていた初等教育用の生理衛生書には，これほどに印象的な人体内臓図は掲載されていなかった．「人体問答」書の制作者たちは，「問答」の内容に関係なく，この文齋の人体内臓図を巻頭図として模倣掲載した．

「人体問答」書は初等教育，しかも，第7級という入学直後の幼童向けの教科書として刊行された．1872（明治5）年の「学制」の公布に伴い日本全国に移植された「学校」という強力な媒介項を得て[26]，「人体問答」書は日本全国に広がった．さらに，「人体問答」書にはデュアル・ニーズがあった．すなわち，「人体問答」書には教員・師範学校生徒という大きな購買層が背景に控えていた．「全体之中部内臓位置之図」類似の「人体内臓図」を掲載した「人体問答」書のそれぞれの実販売数が何部であったかの情報は残されていない．しかし，1876（明治9）年10月刊行の『小学増補校正人体問答』の後書きで，上田文齋は『校正小学人体問答』の版木がすり切れたゆえ，新たに版を起こして新著を出したとしている．上田文齋『校正小学人体問答』は，1878（明治11）年に再版されたが，現在，古書市場に出回る数から見ても相当数，市場に出回ったことが推測できる．

幕末維新期以降，さまざまな情報伝達回路を通じて，西洋解剖学的な人体の「内景」は一般民衆に広がっていったことと思われる．しかし，安価な値段で日本各地で刊行された「人体問答」書を媒介として，上田文齋の作成した人体内臓図が，人体内臓に関する情報の民衆への普及啓蒙に一定の役割を果たしたと言うことができるだろう．

付　記

本研究は文部科学省科学研究費補助金，平成21年～23年度基盤研究（課題番号21500982），および，平成24年～25年度基盤研究（課題番号24501249）の補助を受けて行われました．

文献と注

1）本稿は，下記のそれぞれの学会で一部発表した内容に大幅に加筆し修正したものである．教育史学会第56回大会（2012年9月23日，お茶の水大学：東京），日本醫史学会第114回大会（2013年5月11日，日本歯科大学：東京）．

2）安価本，あるいは，廉価本と表現することが可能だが，本稿では安価本の語を使用していく．今回，調査の対象とした「人体問答」書の値段は，1冊7銭から41銭であった．これを安価とするか否かに関しては判断基準を何におくかによって異なるが，歴史学的な研究対象としては，一般民衆向けに量産された安価本というカテゴリーの中で「人体問答」書を扱うことが可能であると考える．

3）例えば，内務省刊行の，明治10年10月12日出版『版権書目』には，「医学之部」に「人体問答」書が記載されている．朝倉治彦監修．日本書籍分類総目録　第一巻．東京：日本図書センター：昭和62年．p. 141–143

4）諸葛信澄．小学教師必携．（明治6年12月初版，明治8年4月再版）

5）文部省．学制百年史　記述編．東京：帝国地方行政学会；1972．p. 185

6）明治10年8月には再度，改訂され，「第7級～第5級まで，段階を踏んで「人体」を扱う」とされた．

7）代表的なものとして，次をあげておきたい．豊田久亀著．明治期発問論の研究―授業成立の原点を探る―．東京：ミネルヴァ書房；1988

8）ここでは，2点のみあげておきたい．田口喜久恵．近代教育黎明期における健康教育の研究．東京：風間書房；2010，谷津三雄，藤井敏博，江川為明，谷津徳男．小学人体問答書出版の時代考証．日本歯科医史学会誌　1972；No. 4-3: 3–9

9）中村紀久二．教科書物語．東京：ノーベル書房；1984では，明治前期を翻訳教科書時代としている．一つの外国書籍が何人かによって別個に翻訳・翻案され，出版されたことも翻訳教科書の特徴である．また，尾形裕康は，西洋文明移入の方途．（野間教育研究所紀要，第19集）東京：講談社；1961において，明治前期，すなわち，明治元年～23年までの間に刊行された翻訳教科書のリストを示している．

10）文部省．学制百年史　記述編．東京：帝国地方行政学会；1972: p.183–184

11）初等教育教科書の原本として利用されたMarcius Willsonのウィルソン・リーダーの第四巻の「人体の生理解剖」部分は，永田方正によって摘訳され明治9年12月に刊行された．また，カルキンの「教授書」が金子尚政によって意訳され，『小学人体問答』として刊行されたのは，明治10年7月である．

12）加藤勤．人體部分問答．明治8年　緒言

13）学制期においては，必ずしも，同一年齢で入学したわけではないため，実際には多様な年齢の者が在籍していた．

14）「凡例」によると，この目録には明治初年から国定教科書制定実施までに刊行された理科関係の初等教科書が出版年別，書名五十音順に列記されているが，「理科」という教科が日本にはじめて登場するのは1886（明治19）年であり，明治初年には理科初等教科書の範囲は明確ではないため啓蒙書等を含めていくらか広く採録されている．

15）本書は，「自序」「例言」によると，国立教育研究所（現：国立教育政策研究所）による「明治以降教科書総合目録」編纂プロジェクトの一環として編纂されたものであり，国立教育研究所の蔵書（国民精神文化研究所旧蔵本を含む）と，東京学芸大学望月文庫の目録を基本として，これに東京書籍の東書文庫，国会図書館および海後文庫の目録等を加え，総合目録として編集されたものである．「人体問答」書は，全て，［教研］，［東書］，［海後］から採録されている．

16）田口喜久恵は前掲書（注8）で，同時期に刊行された57冊の「人体問答」書をあげている．本稿では，画像データを得ることのできた56冊を検討の対象としている．

17）飾磨県は，1871（明治4）年から1876（明治9）年8月まで存在した，現在の兵庫県の一部から成る行政組織である．

18）堺県は，1868（慶應4）年から1881（明治14）年8月まで存在した，現在，大阪府，奈良県に含まれる地域から成る行政組織である．

19）日本教科書大系　近代篇．東京：講談社　第24巻；1965: p. 9–41.「理科教科書総目録」においては，上田鹿太郎と上田文齋は同一人物とされ，上田文齋『校正小学人体問答』（明治8年12月）は，上田鹿太郎『小学必用人体問答』（明治8年5月）を校正したものとされている．しかし，詳細は別稿に譲るが鹿太郎と文齋が同一人物であった可能性は低いと考えられる．

20）内臓に関する「問答」が「無い」とした「人体問答」書の中には，生殖，急所などに関する「問答」に内臓器官に関する用語が含まれるものがある．

21）1冊の「人体問答」書で2種類以上の元図から図を模刻しているものがあるため，総計は内臓図掲載書数を上回っている．

22）Marcius Willson. The Fourth Reader of the School and

Family Series. New York: Harper and Brothers; 1860. p. 33, 永田方正訳．小学人体窮理問答．第27丁，第九図，第十図
23）フランスから舶載されたオズー制作の人体解剖模型は，日本人たちによって，オランダ語の発音を模して「キュンストレーキ」，あるいは，「キンストレーキ」と呼び慣わされた．現在，日本国内には，4体が保存されている．月澤美代子．福井市立郷土歴史博物館所蔵キュンストレーキの調査と研究．文部科学省科学研究費助成研究報告書．2006.
24）高坂柳軒．下等小学人体問答．明治10年6月刊行：愛媛県，「凡例」
25）上田文齋『校正小学人体問答　二篇』では内臓諸器官について詳しい説明が行われているが，小野田虎太の「問答」内容は，この文齋本を参考にしたものとは思われない．
26）1876（明治9）年の段階において，日本全国の就学児童数は，およそ200万人であった．文部省．学制百年史　資料編．1972: p. 492–493．教育統計　第3表小学校．ただし，在籍者すべてが「教科書」を購入したわけではない．

Dissemination of Anatomical Human Body Images to Common People at the Beginning of the Meiji Era in Japan: Analysis of Illustrations of Human Viscera in the ‘Questions and Answers Concerning Human Body’ Textbooks

Miyoko TSUKISAWA

Department of History of Medicine, School of Medicine, Juntendo University, Tokyo

In this paper, we analyse a collection of elementary school textbooks from the beginning of the Meiji era (1868–1912)—shortly after Japan had signed trade agreements with the U.S.A. and some European countries—in order to investigate the dissemination of a westernised anatomical image of human viscera to common Japanese people. These textbooks were titled ‘Questions and Answers Concerning the Human Body’. We established that from the 46 books that were published between 1875 and 1877, 31 books had ‘questions and answers’ concerning human viscera; 26 out of these 46 books contained anatomical illustrations of the human viscera. The original sources of these anatomical illustrations, which the authors of the textbooks had copied and printed, were very limited. The authors of the prints rarely consulted anatomical books of that time that were published for professional use; they mostly consulted and copied from an anatomical illustration printed in Bunsai Ueda’s textbook, ‘Questions and Answers Concerning the Human Body’. Bunsai’s anatomical illustration of the human viscera was, in a sense, ‘original’ because his painter made a preliminary sketch by combining two anatomical illustrations from Johnston’s anatomical charts, which were imported. This illustration played an important role in the dissemination of the westernised anatomical image of human viscera to the common people across Japan during that time.

Key words: ‘Questions and Answers Concerning the Human Body’ textbooks, anatomical illustration, dissemination of the body image, common people, Meiji-era